

受身文と自発文の連続性に関する考察

— 関与者無表示の受身文をめぐって —

小川 誉子美

キーワード： 関与者無表示の受身文、自発文、他動性、話し手、第三者

0. はじめに

受身はヴォイスのひとつとして位置づけられ、その機能と構造は多様である。一方、自発は、ひとつの文法カテゴリーとして確立しているが、量的にも少なく、その認定は研究者の間でも、微妙に異なる。本稿では、関与者(注1)の表示されていない受身文の中で、特定の動詞で描写された事態を観察し、自発文との関わりを探る。

1. 考察の方法と範囲

受身文の研究において、視点の原理や、主語の有情性との関連が指摘されてきた。能動文・受動文の使い分けに、シルバースティーンの名詞句の階層(注2)や、発話当事者の視点ハイアラーキーが影響しているとすれば、話し手の関心は、三人称より一人称に、無生物より人間にある方が自然であり、関与者が有情者で、主語が無情物である受身文は不自然なものであることになる。しかし、受身文の中には、有情の関与者が表示されない無情物主語の受身文の実例が多く、別の条件の関わりがうかがわれる。また、無情物主語の受身文に関して、日本語教育の立場から習得の困難さが指摘されており(田中1996)、効果的な説明が必要であると思われる。

本稿では、有情者の関与する無情物主語の受身文を対象とする。この種の受身文は自発文と連続性をなすと思われる。連続性を観察するために、受身文では無表示であるが、現実の事態においては関与者が存在し、その関与者が有情の場合をとりあげる。無表示のまま事態に関わることができるのは話し手か、あるいは第三者か、第三者であれば構文的に表示できるのかという点を中心に

観察し、自発文の特徴との関連を探る。

尚、対象は、用法により他動性（注3）に違いが生じる二つの動詞、「観察する」と、他動性がより希薄な「聞く」、そして他動性の無い「思う」を取り上げる。

2. 「聞く」「観察する」による受身文

本節では、動詞「聞く」と「観察する」による受身文について考察する。

1 ガバナー版に聞かれる指揮者の傲慢さ（レコード芸術）

1は、関与者無表示の受身文であり、「聞く」主体には、話し手も含まれる。これに対し、

2 人に聞かれた

2の「聞く」は、積極的に「たずねる」という働きかけを表す行為性をおびた動詞であるが、1の「聞く」は、行為性が希薄である。また、2では関与者の存在が明白で構文的にも表示されうるが、1ではその表示は好まれない。

3 フランス語文化では赤ちゃん言葉は殆ど聞かれない

（0歳児がことばを獲得するとき）

3も、行為性の希薄な動詞であり、「フランス語文化で」と関与者の存在を示さないかぎり、話し手が事態に関与していることになる。

以上の例から、行為性の希薄な「聞く」による関与者無表示の受身文で描かれた事態には、話し手の関与が示されるといえよう。

次に、動詞「観察する」による受身文を考察する。

4 進化論は理論的な矛盾や観察される事実¹に合致しないことに満ちており、とうてい科学的な理論とは見なされないのである。

（ウイルス進化論）

4で描かれた事態では、積極的に関わりを持とうとする関与者の存在は希薄であるが、話し手の関与が読み取れる。一方、

5 田中久氏らによって、老化に伴う細胞死が凝縮した形態をとった細胞として観察され、暗細胞という名で報告されている。（ウイルス進化論）

関与者が表示された5の場合、「観察する」ことによって結果を生み出すという行為の側面があらわれる。4と5は、行為性や積極的な働きかけ手の存在の有無という点で異なる。

また、1と4は、行為性が希薄で関与者無表示の受身文に話し手の関わりが読み取れるという点において共通している。しかも、無表示であるのは文脈上不要であるからではなく、関与者の表示は構文的に不自然であり、無表示のなかに話し手の関与が示唆されているという点においても共通性が伺える。

「聞く」「観察する」などの動詞は、他者に変化を及ぼすというより、自己に変化をもたらす動詞であり、「殺す」など他動性の強い動詞と性格が異なる。

3. 「思う」による受身文

本節では、動詞「思う」による受身文について考察する。

6 「あ・うん」の呼吸で分かり合えることが重要とされ、あえて言葉にすることは秩序を乱すとさえ思われる。 (アエラ34号)

6 では、関与者無表示の受身文に「思う」の主体として、不特定多数の中に話し手が含まれている。本来、「思う」は主観性が強く、一人称に用いられる動詞であるが、次のような例を見ることができる。

7 こうした平等社会では自分のことを自分の言葉で説明する必要がなかった。「あ・うん」の呼吸で分かり合えることが重要とされ、あえて言葉にすることは秩序を乱すとさえ思われる。 (同上)

「平等社会では」において関与者の存在が示され、「思う」主体に話し手のぞく第三者が関わることができる。

一方、動作の主体が第三者であることを明確にするために「思われている」と持続相で示されることがある。これは、「思われる」の他、「想像される」「疑われる」「望まれる」「見られる」「考えられる」など思考活動等を表す動詞においても同様である。このことにより、動作の表す主体が「話し手」か「第三者」か、動詞の形態によって判断できる。

「思う」は、話し手自身について述べることを前提とした動詞であり、描写

された事態に話し手が含まれる。また、主体が第三者であることを明示するためには、「ている」形が使われ、話し手とは区別される。

4. 自発文との連続性

自発は、動詞の形態と、関与者の間で格形式の交替が起こっているという点で、ヴォイスとしての要件をそなえている。自発態の認定をめぐるのは、隣接関係にある自動詞や受身との境界の設定等に関し、研究者によってその範囲に微妙な相違がある。杉本（1988）は自発の機能に関し、「無意思化表現」とあり、「意思による制御が外れやすい傾向をもった心的作用、動作に関してその制御が外れたときの表現である」と特徴づけている（注4）。

2節と3節で観察した内容をもとに、関与者無表示受身文において、話者の関与があるか、第三者の関与があるかという点から、さらに、第三者は構文的に表示できるかという点からまとめると、次のようになる。

	関与者無表示の場合		
	話者の関与	第三者の関与	第三者の表示
殺される	×	○	○
聞かれる(尋ねる)	×	○	○
観察される	○	○	○
聞かれる	○	×	×
思われる	○	×	(○) *:
しのばれる	○	×	×
思い出される	○	×	×
思える	○	×	×

* 専用形式を持つ

まず、他動性の高い動詞「殺される」や「聞かれる（尋ねられるの意）」が、関与者無表示の受身文で表す事態においては、関与者は第三者である。「観察される」「聞かれる」で表された事態への関与は、第三者が中心だが、話し手が含まれる場合もある。「思われる」で表された事態には、話し手自身の関与が示される。第三者の関与は具体的に表示される場合もあるが、一般的には、専用形式「ている」が用いられて区別される。自発をあらわす動詞「しのばれる」「思い出される」「思える」では常に話し手が関与している。

関与者無表示の受身文において、他動性の強い動詞で描かれた出来事は、第三者の行為として理解される。これに対し、主観性の強い動詞で描かれた出来事は、話し手自身が関わった出来事として理解される。そして、出来事の発生が意思の制御が外れて起こったものとして描かれる自発態へとつながっていく様子がうかがわれる。動詞の他動性が弱まるにつれ、表示されない受身文の動作の主体に、話し手が含まれてる傾向がでてくることが予測されるよう。

主体が話し手と限られる動詞の場合は、受身文の関与者も話し手に限られ、自発文の性格を濃厚におびるようになる。他動性の強い動詞の受身文「壊される」「殴られる」「切られる」などには見られない特徴である。

5. まとめ

関与者無表示の受身文をめぐって、表示されていない行為者に、話し手が想定されるか、第三者が想定されるかを観察し、有情の動作主の受身文と自発文の連続関係を見た。

関与者無表示文の核となる性格は、「特記すべき働きかけ手の存在が希薄」なことであろう。言い換えれば、これは、動詞の本来の動作主や話し手が、働きかけ手としてではなく、受け手及び、変化を被る者として関与するということである。また、その行為は主体的に引き起こされたというより、自然の成り行きにより生じたものであり、意識的に働きかけたことによる変化ではなく、無意識状態になることによって生じた変化であろう。受身文が、自発文の特徴と重なり、連続性をなしていく様子に関与者の素性という点から見た。

注

- 1 関与者という用語は、動作主及び、動作の受け手に関しても使われることがあるが、本稿では、出来事や変化を誘発した主体という意味で用いる。
- 2 角田（1991:39）による。
- 3 他動性の有無・強弱に関しては、工藤（1990:62）の分類をもとにする。
- 4 自発の定義に関し、「思われる、借しまれるなど感情動詞に限られる」（村木1991）、「しのぶ、悔やむ、判断する、思いやる、悩む、推定するなど心的作用をあらわす叙情の自発を中心に、受け身や可能、無意思性の自動詞と隣接関係をもつ」（杉本 前傾）などがある。一方、寺村(1982)は「動作・作用の主体は意識されず、X（ガ格）がひとりでにそうなるということを表す」とする。また、受動表現との違いを「述語の表す事態を引き起こしたものの存在が意識されているのといないのとの違い」とし、焼ける、割れる、抜ける、売れる、切れるなども自発表現として扱う。

本稿をまとめるにあたり、安藤節子先生に貴重なご意見をいただいた。ここに心より感謝の意を表したい。

参考文献

- 1 奥津敬一郎（1983）「何故受け身か」『国語学132』武蔵野書院
- 2 工藤真由美（1990）「現代日本語の受動文」『ことばの科学4』むぎ書房
- 3 杉本和之（1988）「現代語における自発の位相」『日本語教育66号』
- 4 田中真理代表（1996）『平成7年度科学研究費補助金研究成果報告書「ヴォイスに関する中間言語研究—複文におけるねじれ文の研究から—』
- 5 角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 6 寺村秀夫（1982）『日本語の意味とシンタクス1』くろしお出版
- 7 益岡隆（1991）「受動表現と主観性」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 8 村木新次郎（1991）「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版
- 9 同上（1989）「ヴォイス」『講座日本語と日本語教育4』明治書院